資　料

ポティエ『新編ユスティニアヌス学説彙纂』第50巻第17章第1部抄

吉原達也　訳編

日本法学　第八十一巻第三号（二〇一五年十二月）

解題

本稿は，ポティエ[1]『新編ユスティニアヌス学説彙纂』Pandectae Justinianeae in novum ordinem digestae[2]の最終章第50巻第17章「古法のさまざまなレグラエについてDe diversis regulis juris antiqui」のうち，第1部　法の一般的レグラエ（Prima Pars de regulis juris generalibus, aut quae ad praevias quasdam legum notiones pertinent）のうち，ポティエ自身による詳細な注釈の部分を割愛し，レグラの部分のみを対訳の形式で訳出したものである。なお原文テキストは，原則としてフランス語対訳版に拠っている。

『学説彙纂』は第50巻第16章「語の意味についてDe verborum significatione」[3]及び第17章「古法のさまざまなレグラエについて」という2章をもって閉じられる。前者は，個別の語句及び節の意味についての法学者の見解について246法文を収録する。後者は，211の法文からなり，それぞれが一ないし複数のレグラエを提示する。第17章はその包括的な内容と『学説彙纂』の掉尾を飾るというその位置によって，11世紀ローマ法学の復興以来長く法学者たちの注目を集めてきた[4]。スタインは，同章の影響について二点のことを指摘している。1　レグラエを最後に一章にまとめられていることは，ユスティニアヌスがレグラエをとくに重視したこと，他のさまざまな規則類に対してレグラエに優位を与えたということを示唆する。2「一般原則」

general principles という概念及びかかる原則と他の法体系との関係を論じる機会を与えた。スタインによれば「一般概念」の形成という点で，ポティエ『新編ユスティニアヌス学説彙纂』最終章のもつ意味は大きい(5)。

ポティエ『新編ユスティニアヌス学説彙纂』最終章に集録されたレグラの数は，第 50 巻第 17 章の 211(6) をはるかに超えて，実に 2,025 にまで及ぶ(7)。もとより本来の第 50 巻第 17 章には体系的な配列はとられていなかったが，これに対して，ポティエは，自らが案出した膨大なレグラエを，一般，人，物，訴訟，公法という五部制の分類のもとにまとめあげている。冒頭に第 1 部に先だって，「本章に於いてまず吟味されるべきは，レグラエ及び古法によってトリボニアヌスが理解したことは何かを知ることである。」として，以下の 3 項目を取り上げる。まず，I において，D.50,17,1 のパウルス『プラウティウス注解』から，プラウティウスのレグラに関する定義及びパウルスのこれについての解釈を掲げる(8)。II において，同じくパウルス『プラウティウス注解』からレグラの限界について引用し，これを受けて有名な「法の定義は危険である」とする D.50,17,202 法文を掲げる(9)。III において，「古法」の意味を明らかにする(10)。これに続いて，本論の第 1 部として法の一般的なレグラについて記述される。

全体の概観を得るために，以下に第 1 部の目次を掲げる。

PRIMA PARS. DE REGULIS JURIS GENERALIBUS, AUT QUAE AD PRAEVIAS QUASDAM LEGUM NOTIONES PERTINENT.　第 1 編　法の一般的なレグラエについて，あるいは，法律概念に先行する事柄について

SECTIO I. Exponuntur regulae generales, sive naturalis juris, sive civilis, quae nulli certae tractationi peculiares sunt.　第 1 節　自然法ないし市民法に関する一般的なレグラエが提示されること

Articulus I. Regulae ex ipsa rerum naturae petitae.　第 1 款　事物の本性より求められるレグラエ

Articulus II. Regulae ex primis juris et aequitatis naturalis praeceptis deductae.　第２款　自然法並びに自然的衡平の第一命題より導かれるレグラエ

Articulus III. Regulae generales ex jure civili petitae.　第３款　市民法より求められる一般的なレグラエ

SECTIO II. Regulae circa leges ipsas, earum vim et interpretationem: ubi de consuetudine et rescriptis.　第２節　法律自体，その意味及び解釈に関するレグラエ，

Articulus I. De legibus proprie dictis.　第１款　本来的にいわゆる法律について

§1. De legus constituendis.　第１項　法律を制定することについて

§2. De virtute legis.　第２項　法律の効力について

§3. Regulae ad perspiciendum legis sensum.　第３項　法律の意味を認識するためのレグラエ

§4. Regulae circa investigationem mentis legis.　第４項　法律意思の探求に関するレグラエ

Primum theorema. — Regulae practicae.　第１目　実践的なレグラエ

Secundum theorema. — Regula practica.　第２目　実践的なレグラ

§5. De officio jurisconsulti circa species de quibus diversae leges sunt, aut de quibus nulla lex scripta est.　第５項　当該事項について複数の異なった法律が存在する場合或いは何ら書かれたる法律の存在せざる場合の法学者の職務について

Articulus II. De consuetudine seu jure non scripto.　第２款　慣習もしくは不文法について

Articulus III. De privilegiis et rescriptis.　第３款　特権及び詔勅について

§1. Regula communis omnibus beneficiis; sive certae personae, sive certo personarum generi concessa sint.　第１項　特定の人若しくは特定の人の類に認められたるすべての恩恵に共通なるレグラ

4

§2. Regulae circa beneficia personalia.　第2項　個人的恩恵に関するレグラ

以下，本編の4部門がこれに続く。

SECUNDA PARS. DE PERSONIS　第2部　人について

TERTIA PARS. DE REBUS.　第3部　物について

QUARTA PARS. DE LEGIS ACTIONIIS, AC PRAESERTIM DE JUDICIIS.　第4部　法律訴訟及びとくに訴訟手続について

QUINTA PARS. DE NONNULLIS CAPITIBUS AD JUS PUBLICUM PERTINENTIBUS.　第5部　公法に関わる少なからざる章について

第1部の標題に示されるように，本書の冒頭で，ポティエは，さまざまなレグラエの中から「一般的な」レグラエを抽出する。しかしそれはパンデクテンのもつ所謂「総則」に類する性格のものでないことは明らかである。ポティエが，ローマ法源からいかなるものを「一般的」なものとして抽出し，それをいかに特徴づけているかは，個別に検討することが必要である。菊池氏の言葉を借りれば，ポティエは「個別の法カテゴリーに属さない一般的法準則 generale rules」(11)のみを抜き出しているのであるが，このことがポティエのレグラエ論の大きな特徴として指摘できる。

レグラエの配列として，「法学提要システム」が採用されている。各編における個々のレグラの配列に関して，ポティエとドマとの関係性が菊池氏によって指摘されている。ドマの「その市民的秩序による市民法」Les Loix civiles dans leur ordre naturel, (1689) (12)及び『抜萃法令集』(Legum delectus ex libris digestorum & codcis ad usum scholae et fori) において，レグラエを扱っている。両者の間にいなかる関係が存在しているのか，今後の課題としたい。ポティエ「レグラエ論」のもつ歴史的な位相を明らかにするためにはさまざまな準備的作業を必要とす

る。本稿もポティエ「レグラエ論」の全体像がどのようなものであるか，具体的に把握するための作業の一部であり，今後，第2部以下の検討も継続して行われることを予定している。

ル・トローヌ（Le Trosne）はその『ポティエ伝』において，『新編ユスティニアヌス帝学説彙纂』最終2章の形成について触れている。

「学説彙纂の最終2章は「語義について De verborum Significatione」と「法のレグラエについて De Regulis Juris」である。ポティエは両章をきわめて重要かつ浩瀚なものたらしめた。それらはフォリオ版にして275頁に及ぶ。かの「法のレグラエについて」において，彼は，豊穣なみのりをもたらしローマ法学者たちが抜群の明確さで表現した法原則を学説彙纂全巻より収集し優れた順番で配列することにより，法全体を要約してみせた。

その事情は次のようなものであったと思われる。著作のこの部分を最初に構想し，その作業にとりかかるきっかけを与えたのは，大法官閣下［ダゲッソー］であった。ポティエ氏は両章を完成させたあとそれらを独立した作品として公刊するつもりであったが，大法官の，法文自体の忠実な抜萃からなる価値多き収集品によってその作業を締めくくればいかにすばらしいかという勧告に従った。この巨大な作品の完成にポティエは12年，もしそのために必要な研鑽の時間を加えれば，25年の歳月を費やした。」(13)

（1） ポティエに関して，大川四郎「ロベール・ジョゼフ・ポティエ」勝田有恒・山内進編『近世・近代ヨーロッパの法学者たち グラーティアヌスからカール・シュミットまで』ミネルヴァ書房・2008年所収，235頁以下。

（2） 3 vols., 1748 ～ 52. 本稿では，Pothier,R.J, *Neuville Pandectes de Justinien, mises dans un nouvel ordre*, avec les lois du code et les novelles qui confirment, expliquent ou abrogent le droit des pandectes, traduites par M. de Bréard, tome 23 Paris Dondey-Dupré, 1823.;Pothier, Robert Joseph, *Oeuvres de Pothier,* Nouvelle éd. Paris: Dabo Jeune 1825.; このほかに，Pothier, *Pancectae Justinianeae in Novum ordinem Digestae*, 4 tom., Paris 1819の参照については，日本大学比較法研究所

員・菊池肇哉氏のご厚意を得たことを感謝申し上げる。吉原達也「『学説彙纂』第五〇巻第一七章第一法文について――ポティエ『新編ユスティニアヌス学説彙纂』レグラエ論序章――」日本法学第 80 巻第 2 号 2014 年 10 月刊，77-105 頁。第一部に関する方法論的な詳細な検討として，菊池肇哉「ポティエ『法準則論』中の「一般的法準則」における方法論的分析：ポティエ「新序列」とドマ「自然的秩序」の相克と統合」日本法学第 81 巻 1 号 2015 年 6 月刊 1 ～ 35(280 ～ 246) 頁がある。レグラエ研究に関する諸文献に関する書誌情報について菊池論文の参照されたい。

（3） 柴田光蔵「ローマ法学者のコモンセンス」『京都大学法学部創立百周年記念論文集　第 1 巻　基礎法学・政治学』京都大学法学部百周年記念論文集刊行委員会編・有斐閣　一九九九年。現在では，ROMAHOPEDIA（[D]　部　門　）(2013) Issue Date: 2013-07-01, URL: http://hdl.handle.net/2433/175506 も参照。

（4） Stein, Peter, The Digest Title, De diversis regulis iuris antiqui and the General Principles of Law, in : Ralph Abraham Newman (ed.), ***Essays in Jurisprudence in Honor of Roscoe Pound***. Indianapolis, Bobbs-Merrill. 1--20 (1962) ; now in: Stein, Peter, ***The character and influence of the Roman civil law: historical essays***, London Ronceverte: Hambledon Press 1988, p.53-72.; Schmidlin, Bruno, ***Die römischen Rechtsregeln: Versuch einer Typologie***, Forschungen zum römischen Recht 29, Köln: Böhlau 1970.

（5） 一般的法準則という考え方について，菊池・前掲・8 (273) 頁を参照。

（6） 本稿では，訳出に当たり，とくに柴田光蔵『ローマ法便覧』6. [E] 部門「学説彙纂第五〇巻第一七章『古法の各種の法範について』試訳」2013 年 7 月 URL：http://hdl.handle.net/2433/175506 掲載の翻訳をとくに参照させていただいている。田中周友「ローマ法に於ける法原則の研究学説彙纂第五十巻第十七章邦訳」『甲南法学』第 11 巻第 4 号（1971 年）【書評】赤井伸之『法制史研究 23〈1973〉』(1974 年) 所収。ローマ法源の既訳として，春木一郎訳『ユースティーニアーヌス帝学説彙纂ΠＰΩＴＡ』有斐閣・昭和 13 年。佐伯好郎訳「ユ帝欽定勅法彙纂邦訳」（1）～(27) 法律論叢 15 巻（1936 年）～ 22 巻（1944 年）。京都大学西洋法史研究会訳「ユスティニアヌス帝学説彙纂第 20 巻～第 28 巻邦訳」法学論叢第 63 巻 6 号～第 83 巻 6 号（1968 年）その他を随時参照させていただいた。

（7） Stein, Peter, ***Roman law in European history*** Cambridge, Cambridge University Press, 1999. ピーター・スタイン著／屋敷二郎監訳関良徳 , 藤本幸二訳『ローマ法とヨーロッパ』京都：ミネルヴァ書房・2003 年，147 頁を参照。1819 年のパリ版 (前注 2) では，2025 を数えるようである。レグラエの数について，菊池・前掲 35 頁注 61 を参照。

（8） 吉原・前掲 80 頁。

（9） 吉原・前掲 81 頁。

(10)　吉原・前掲 82 頁。

(11)　菊池・前掲 8 (273) 頁。

(12)　Jean Domat, *Les Loix civiles dans leurs ordre naturel*, 1689; Nonvelle ed. 2 tom, 1777; *The Civil Law in its Natural Order*, 2 vols. 1850, Reprint ed. Littleton, Colorado 1980.

(13)　Guillaume-Francois Le Trosne, Éloge historique de M Pothier, conseiller au présidial d'Orléans et professeur de droit français en l'Université de la même ville, in: *Oeuvres de Pothier, tom. 1*, Paris 1822 p.17, 32.; これにはさまざまな刊本がある。*Eloge historique de Pothier, conseiller au présidial d'Orléans, & professeur de droit français en l'université de la même ville*, Veuve Rouzeau-Montaut, 1773. 英語訳として，例えば *A Treatise on the Law of Obligations, Or Contracts*, vol., London 1806, p.1sqq. 10sq.; David Hoffman, *Course of Legal Study*, 2nd. ed. vol II, Baltimore 1836, 554. なお，トローヌのポティエ伝について，菊池前掲 32 頁注 24 を参照。

ポティエ『新編ユスティニアヌス帝学説彙纂』第 50 巻 17 章第 1 部

第 17 章にして最終章　古法のさまざまなレグラエについて

本章において検証すべき最重要なことは，トリボニアヌスがレグラエと古法によって理解したことを知ることである。

I. 第 1 のレグラ，即ちレグラの定義

プラウティウスの定義によればこうある，

Regula est, quae rem quae est breviter enarrat. Non ex regula ius sumatur, sed ex iure quod est regula fiat. (D.50,17,1. Paulus 16 ad Plautium)「レグラとは，存在する事柄を簡潔に述べるものである。レグラから法がとりだされるのではなく，存在する法からレグラが生まれる。」

この定義をパウルスはこう解する，

Per regulam igitur brevis rerum narratio traditur, et, ut ait Sabinus, quasi causae coniectio est, quae simul cum in aliquo vitiata est, perdit officium suum. (D.50,17,1. Paulus 16 ad Plautium)「つまり，レグ

ラエにより事柄は簡潔に叙述される，そして，その叙述は，サビヌスの言によれば，あたかも事項の略述にあたり，これは，何らかの点で傷がつくと，その効力を失なう。」

II. レグラは容易に悪用される，

hinc plerumque sub auctoritate juris scientiae, perniciose erratur. (D.45,1,91,3. Paulus 17 ad Plautium)「それゆえ法知識の権威のもとに，たびたび騙されて破滅に至る。」

Omnis definitio in iure civili periculosa est: parum est enim, ut non subverti posset. (D.50,17,202. Iavolenus 11 epistularum)「市民法における定義はすべて危険である。実際，それが覆えされぬことなどまれだからである。」

III. ここで，「古法」という語によって理解すべきは，12表法でもその後に廃止された法でもなく，ローマ国民が長く用いてきた古の解釈者たちの法賢慮，そして，その文献によって『学説彙纂』が編纂されたところの当の法学者たちの広く受け入れられてきた調和ある定義類である。かかる法が，「古の」と呼ばれる所以は，コンスタンティヌス帝からユスティニアヌス帝自身に至るまでのより新しい皇帝たちによってさまざまな新しい論題について制定された法以前のものだからである。しかし，トリボニアヌスをしても，本章に古法のレグラすべてを採録したということはおよそありえないことである！それどころか，そのようなことは彼の目的ではなかった。彼は，たんに少なからざるさまざまなレグラエを，法に関心をもつ者たちの嗜好にそうように並べただけである。

吾等は，まったく別の配列と編成をもって，はるかに多くのものを集めた。吾等は前章の冒頭で誓いを立てた約束を同章の考察に当たって果たすよう努めたが，本章においてもその約束の履行を果たしたいと思う。それゆえ，法のレグラを説明するにあたり，吾等は，古法学者の見解を含むレグラだけでなく，トリボニアヌス自身によって付された表題に従って，クヤキウスが正しくも本章に属する

と認めているレグラにも言及することにしたい。吾等は，『学説彙纂』各章であれ，皇帝勅法であれ，その他の法源であれ，ありとあらゆるところから，ユスティニアヌス『学説彙纂』の法全体のいわば索引となるべき簡潔な章句を抜粋した。

吾等は一般的指針をもとに，法全体にわたって個々の題材を渉猟し，そして法の研究に勤しむ人々が容易に記憶していただけるよう，それらを一定数の簡潔な章句にまとめた。

本書の構成

本書は5部からなる。

第1部においては，自然法であれ，市民法であれ，法の一般的なレグラがまず提示される。というのは，これらは，特定の個々の問題とは関係がないと言われうるからであり，さらには法の概念及びその解釈に先立つものだからである。

第2部　人について

第3部　物について

第4部　訴権もしくは司法，私法制度について

つまり，この三者が一般的な私法の主題である。「吾等が用いる法はすべて，人に関わるか，物に関わるか，訴権に関わるかだからである。」ユスティニアヌス『法学提要』1,2,12。

第5部においては，吾等は公法を論ずるであろう。

PRIMA PARS DE REGULIS JURIS GENERALIBUS, AUT QUAE AD PRAEVIAS QUASDAM LEGUM NOTIONES PERTINENT.　第1部　法の一般的なレグラエについて，あるいは，指導的な法律概念に関する事柄について

SECTIO I. Exponuntur regulae generales, sive naturalis juris, sive civilis, quae nulli certae tractationi peculiares sunt.　第1節　個別のことが確たる範疇に属さない自然法ないし市民法に関する一般的なレ

グラエが提示されること

Articulus I. Regulae ex ipsa rerum naturae petitae.　第１款　事物の本性自体より導かれるレグラエ

IV. Naturalis jura, divina quadam providentia constituta semper firma atque immutablia permanent. (Inst.1,2,11.)「自然法は，いわば神の摂理により制定され，つねに確定かつ不変のうちに継続す。」

Civilis ratio naturalia jura corrumpere non potest. (D.4,5,8, Gaius 4 ad edictum provinciale.)「市民法上の原則は自然法の規範を破壊するを得ず。」

V. Jura sanguinis nullo jure civili dirimi possunt. (D.50,17,8. Pomponius 4 ad Sabinum)「血縁関係の法は，いかなる市民法に因りても破られ得ず。」

VI. Quae rerum natura prohibentur, nulla lege confirmata sunt. (D.50,17,188,1)「事物の本性により禁止されたるものは，いかなる法律によっても承認されることなし。」

VII. Neque imperare sibi neque se prohibere quisquam potest. (D.4,8,51, Marcian 2 reg.)「何人も自己に対して命令又は禁令を発することを得ず」。

VIII. 1 Nulla voluntas errantis est. (D.39,3,20. Pomponius 34 ad Sabinum)「錯誤者の意思は無効である。」

2. Nihil facit error nominis, cum de corpore constat. (D.18.1,9,1. Ulpianus 28 ad Sabinum)「名称の錯誤は，客体について確定しているときには，何ら生じない」

3. Velle non creditur, qui obsequitur imperio patris vel domini. (D.50,17,4 Ulpianus libro sexto ad Sabinum)「家長あるいは主人の指示に従う者は，自ら欲するとは信じられず。」

4. In totum omnia, quae animi destinatione agenda sunt, non nisi vera et certa scientia perfici possunt. (D.50,17,76. Papinianus 24 quaestionum)「一般に，凡そ意思の決定によってなされるべきことは何ごとも正し

くかつ確かな認識によらざれば，成就し得ず。」

5. Qui tacet, non utique fatetur: sed tamen verum est eum non negare. (D.50,17,142. Paulus 56 ad edictum)「沈黙者は必ずしも自認するに非ず，しかし，その者が否認せざることが真実なり。」

IX. 1. Cujus rei species eadem consisteret, rem quoque eamdem esse existimari. (D.5,1,76 fin. Alfenus 6 dig.)「ある事物はその性質が同一であれば，その事物もまた同じであるとみなされる。」

2. Mutua forma prope interimit substantiam rei. (D.10,4,9 Ulpianus 24 ad edictum)「形を変じたるものは事物の本質をほぼ変じたり。」

X. Quod pendet, non est pro eo, quasi sit. (D.50,17,169,1. Paulus libro 2 ad Plautium)「未確定なることは，あたかも存在するかのようには看做されず。」

XI. 1. Rerum vocabula immutabilia sunt, hominum mutabilia. (D.30,4. Ulpianus 5 ad Sabinum)：「事物の名称は不可変なるも，人物の名称は可変的なり。」

2. In ambiguo sermone non utrumque dicimus, sed id duntaxat quo volumus. Itaque qui aliud dicit quam vult; neque id dicit quod vox siginificat, quia non vult; neque id quod vult, quia id non loquitur. (D.34,5,3. Paulus 14 quaestionum)「曖昧なる表現においては，吾人は双方のことを言明するに非ずして，吾人が欲することのみを言明す。つまり，ある者が自らの欲することとは別のことを言明せし場合がこれなり。発語が意味するを言明せざるは欲せざるがゆえなり。欲することを言明せざるは，それを語らざるがゆえなり。」

XII. Nemo plus iuris ad alium transferre potest, quam ipse haberet. (D.50,17,54. Ulpianus 46 ad edictum)「何人も自らが有するよりも多くの権利を他者に移転するを得ず。」

Nullus videtur dolo facere, qui suo iure utitur. (D.50,17,55. Gaius libro secundo de testamentis ad edictum urbicum)「自らの権利を行使する者は誰も悪意にて為すと見られず。」

12

Item qui jussu judicis aliquid facit, non videtur dolo malo facere, qui parere necesse habet.（D.50,17,167,1. Paulus 49 ad edictum）「裁判官の命令により何事かを為す者は，この者が従うべき以上，悪意により為すとは見られず。」

XIII. Non videntur rem amittere, quibus propria non fuit.（D.50,17,83. Papinianus 2 definitionum）「自らの所有となしえざりし者は，その物を喪失するとは見られず。」

Non potest videri desisse habere, qui numquam habuit.（D.50,17,208. Paulus 3 ad legem Iuliam et Papiam）「一度たりと所持せざりし者は所持を断念するとは見られず。」

Semper qui dolo fecit, quo minus haberet, pro eo habendus est, ac si haberet.（D.50,17,157,1. Ulpianus 71 ad edictum）「自身が所持せざるように悪意でなした者，つねに，あたかも彼が所持するかの如くに扱われるべきである。」

Parem esse condicionem oportet eius, qui quid possideat vel habeat, atque ejus, cujus dolo malo factum sit, quo minus possideret vel haberet.（D.50,17,150. Ulpianus 68 ad edictum）「あるものを［現に］占有するかあるいは所持する人の状況と，［自身の］悪意によって自身が［あるものを］占有するかあるいは所持するようなことがないようにした人の状況とは，同等であることを要する。」

Quod quis ex culpa sua damnum sentit, non intellegitur damnum sentire.（D.50,17,203. Pomponius 8 ad Quintum Mucium）「ある人が自身の過失によって損害をこうむる場合には，その人が損害をこうむるものとは理解されない。」

XIV. .1 In toto et pars continetur.（D.50,17,113. Gaius 3 ad edictum provinciale）「全体のなかに部分も含まれる。」

Semper specialia generalibus insunt.（D.50,17,147 Gaius 24 ad edictum provinciale）「特殊はつねに一般に内在する。」

In eo, quod plus sit, semper inest et minus.（D.50,17,110pr. Paulus 6 ad

edictum)「より多いもののなかに，つねに，より少ないものも内在する。」

Non debet, cui plus licet, quod minus est non licere. (D.50,17,21. Ulpianus 27 ad Sabinum)「より多くを許されたる者にして，より少なきを許されざるべからず。」

2. Contra　反対

In toto jure generi per speciem derogatur et illud potissimum habetur, quod ad speciem derectum est. (D.50,17,80. Papinianus 33 quaestionum)「およそ法において，類は種により部分的に破られる。そして，かの種に関係づけられたもの［契約当事者間の個々の決定］は，最重要なものとされる。」

XV. Invito beneficium non datur. (D.50,17,69. Paulus libro singulari de adsignatione libertorum)「その意に反して利益は付与されず。」

Quod cuique pro eo praestatur, invito non tribuitur. (D.50,17,156,4. Ulpianus 70 ad edictum)「各人にその分に応じて授けられるものは，その意に反して配分されるなかれ。」

Unicuique licet contemnere haec quae pro se introducta sunt. (D,4,4,41, Iulianus. 45 digestorum).「何人も自己のために設けられたものを放棄するは自由なり。」

XVI. Ejus est nolle, qui potest velle. (D.50,17,3. Ulpianus 3 ad Sabinum)「欲せぬことは，欲し得る者のみができる。」

Quod quis si velit habere non potest, id repudiare non potest. (D.50,17,174. Paulus 8 ad Plautium)「人は欲すれど手に入れ得ぬものを拒み得ず。」

XVII. In omnibus causis id observatur, ut, ubi personae condicio locum facit beneficio, ibi deficiente ea beneficium quoque deficiat, ubi vero genus actionis id desiderat, ibi ad quemvis persecutio ejus devenerit, non deficiat ratio auxilii. (D.50,17,68. Paulus libro singulari de dotis repetitione)「あらゆる事例において以下のことが遵守される。つまり，

それは，人の状況が利益を生じさせるところでは，その人が欠けると，［その］利益も欠ける，ということであり，他方で，訴権の種類がこのことを求めるところでは，そのことの追求が誰のもとに帰したとしても，救済の理が欠けることはない，ということである。」

Plus cautionis in re est quam in persona. (D.50,17,25. Pomponius 11 ad Sabinum)「人におけるよりも，物において，より多い担保が存在する。」

Minus est actionem habere quam rem. (D.50,17,204. Pomponius 28 ad Quintum Mucium)「訴権を有するとは，物自体を所持するより有利にあらず。」

Contra　反対

Is, qui actionem habet ad rem reciperandam, ipsam rem habere videtur. (D.50,17,15. Paulus libro quarto ad Sabinum)「物をとりもどすための訴権を保有する人は，［その］物それ自体をもつものと考えられる。」

Quod a quoquo poenae nomine exactum est, id eidem restituere nemo cogitur. (D.50,17,46. Gaius 10 ad edictum provinciale)「何人も，任意のある人から罰金の名目で請求してえられたものを，その人に返還することを強制されず。」

Quidquid in calore iracundiae vel fit vel dicitur, non prius ratum est, quam si perseverantia apparuit judicium animi fuisse. Ideoque brevi reversa uxor nec divortisse videtur. (D.50,17,48. Paulus 35 ad edictum)「激しい怒りの中での行為や言動はすべて，持続してそれが精神の判断であったことが明らかになるまでは有効ではない。それゆえ，すぐに出戻った妻も離婚しなかったものと見られる。」

Ubi lex duorum mensum fecit mentionem, et qui sexagensimo et primo die venerit, audiendus est: ita enim et imperator Antoninus cum divo patre suo rescripsit. (D.50,17,101. Paulus libro singulari de cognitionibus)「法律が 2 カ月について言及した場合には，61 日目に来た者も聴かれ

るべきである。実際，アントニヌス帝も，その父神皇とともに，このように指令せり。」

Articulus II. Regulae ex primis juris et aequitatis naturalis praeceptis deductae.　第２款　自然法並びに自然的衡平の第一命題より導かれるレグラエ

XVIII Juris praecepta sunt haec; honeste vivere alterum, non laedere, suum cuique tribuere. (D.1,1.10. Ulpianus 1 reg.)「法の指導原理は次の如し，即ち，常道に従いて生活すること他人を害せざること及び各人にその有すべき権利を配当することなり。」

XIX. Non omne quod licet honestum est. (D.50,17,144pr. Paulus 62 ad edictum)「許されたることが必ずしもすべて立派ならず。」

XX. 1. Cum inter nos cognationem quamdam natura constituit, consequens est homini insidari nefas esse. (D,1,1,3. Florentinus 1 institutionum)「自然が人類相互間に謂わば血縁関係を作りたる以上，人類を害するが不法なるは必然なり。」

2. At vero: Adversus periculum natralis ratio permittit se defendere. (D.9,2,4.Gaius 7 ad edictum provinciale) しかし「危険に対して自己を防衛するは自然の理の許容するところなり。」

Licet: Vim vi repellere. (D.4,2,12,1.Ulpianus 11 ad edicum)「暴力に報いるに暴力を以てすることを得。」

Jure, hoc evenit; ut quod quisque ob tutelam corporis sui fecerit, jure fecisse existimetur. (D.1,1,3 Florentinus 1 institutionum).「かかる法の結果として，自己の身体保護の行為は適法のものと認められる。」

XXI. Unusquisque suis fruatur, et non inhiet alienis. (C.10,5,1, fin.)「各人は各人のものを享受すると雖も，他人のものを欲するなかれ。」

XXII. Prodesse unusquisque sibi, dum alii non nocet, non prohibetur. (D.39,3,1,11, Ulp.「各人は他人を害せざる限り，自らに益するを禁じられず。」

XXIII. Non debet alteri per alterum iniqua condicio inferri. (D.50,17,74. Papinianus libro primo quaestionum)「自ら関与せざる時，いかなる損害も他人により被ることなかれ。」

Corollaria　系

1. Naturalis simul e civilis ratio suasit, alienam conditionem meliorem quidem etiam ignorantis et inviti nos facere posse deteriorem non posse. (D,3,5,39 Gaius 3 obl. verb.)「自然上並びに法律上の道理は他人の知らざる場合又は其の意に反する場合であってもその者の状態を良化し得るもこれを悪化し得ぬことを原則とした。」

2. Factum cuique suum, non adversario nocere debet. (D.50,17,155pr. Paulus libro 65 ad edictum)「各人の行為は自らを害するも，相手方を害すべからず。」

3. Neque debet nocere factum alterius, ei qui nihil fecit. (D.39,1,5,5. Ulpianus 52 ad edictum)「他人の行為にして，これに関わらざる者を害すべからず。」

4. Non deberet alii nocere quod inter alios actum esset. (D.12,2,10. Paulus 80 ad edictum)「他人間で為されたることはこれと無縁の者を害すべからず。」

XXIV. Iniuriam quae tibi facta est, penes te manere, quam ad alium transferri, aequius est. (D.46,1,67. Paulus 3 ad Nerat. Except.)「汝に為されたる不法行為を汝のもとに留めるはこれを他人に移すよりも一層衡平に適う。」

XXV. Nemo potest mutare consilium suum in alterius iniuriam. (D.50,17,75. Papinianus 3 quaestionum)「誰も，他人の不利となるべく自身の意思を変更するを得ず。」

XXVI. Jure naturae aequum est neminem cum alterius detrimento et iniuria fieri locupletiorem. (D.50,17,206. Pomponius 9 ex variis lectionibus)「誰も，他人の損失および損害によって富まざることは，自然の法によって衡平である。」

Bono et aequo non conveniat, aut lucrari aliquem cum damno alterius, aut damnum sentire per alterius lucrum. (D.23,3,6 Pomponius 14 ad Sabinum)「人にして他人の損害で利得するか或いは他人の利得により損害を被ることは善と衡平に合致せず。」

(Heres aut alius quilibet) Non debet lucrari ex alieno damno. (D.4,3,28, Gaius 4 ad edicum provinciale). (相続人その他誰であれ)「他人の損害により利得すべからず。」

XXVII. Bona fides non patitur, ut bis idem exigatur. (D.50,17,57. Gaius 18 ad edictum provinciale)「誠意は，同一［物］が再度請求されるようなことを許さない。」

XXVIII. Probo hanc esse justitiam, quae suum cuique ita tribuit ut non distrhatur ab ullius personae justiore repetitione. (D.16.3.31,1. Tryphonin. 9 disput.)「何者かのより正当なる返還請求により妨げられざるよう，各人に各人のものを分配することが正義にかなうと余は是認す。」

XXIX. Non est ex fide bona; rem suam dominum praedoni restituere compelli.「所有者が自らの物を略奪者に返還するを強制されるは信義にかなわず。」同上 31 の quia 以下。

XXX. 1. Secundum naturam est commoda cuiusque rei eum sequi, quem sequentur incommoda. (D.50,17,10. Paulus 3 ad Sabinum)「各個の事柄のもたらす利益が不利益を蒙る者に属するということは，自然に従う。」

2. Ubi periculum, ibi et lucrum collocetur. (C.6,2,22,3a.)「危険あるところ，また利得も置かるべし。」

3. Ex qua persona quis lucrum capit, eius factum praestare debet. (D.50,17,149. Ulpianus 67 ad edictum)「ある者がその人より利得した当のその人の行為に責任を負うべし。」

4. Aequum est, ut cujus participavit lucrum, participet et damnum. (D.17,2,55 fin. Ulpianus 30 ad Sabinum)「利得を得る者は損害もまた得る

ことは衡平なり。」

XXXI. Cujus effectus omnibus prodest, eius et partes ad omnes pertinent. (D.50,17,148. Paulus 16 brevis edicti)「あることの効果が全員の利益となる場合に，その［負担の］部分も全員に帰属する。」

XXXII. (Est) Iniquum, damnosum cuique esse officium suum. (D.29,3,7 Gaius 7 ad ed prov.)「各人にとって自らの職務が損害となるは不衡平なり。」

XXXIII. Adjuvari nos, non decipi beneficio oportet. (D.13,6,17,3. Paulus 29 ad edictum.)「吾人は便益により助けらるべきにして，欺かるべからず。」

XXXIV. Nemo ex suo delicto meliorem suam condicionem facere potest. (D.50,17,134,1. Ulpianus 21 ad edictum)「何人も自らの不法行為により自身の状況をよりよきものなしえず。」

Corollarium　系

Nemo de improbitate sua consequitur acitonem. (D.47,2,12,1 Ulpianus 29 ad Sabinum)「何人も自らの不正により訴権を得ず。」

XXXV. Alterius circumventio alii non praebet actionem. (D.50,17,49. Ulpianus 35 ad edictum)「第三者の詐害は関与せざる者のためにいかなる訴権も与えず。」

XXXVI. Fides bona contraria est fraudi et dolo. (D.17,2,3, § fin. Paulus 32 ad edictum)「信義誠実は，詐害及び悪意に相反す。」

XXXVII. Domus, tutissimum cuique refugium atque receptaculum. (D.2,4,18 Ulpianus 5 ad edictum)「およそ家宅は各人の最も安全なる避難所かつ隠れ家なり。」

XXXVIII. In omnibus quidem, maxime tamen in iure aequitas spectanda est. (D.50,17,90. Paulus 15 quaestionum)「たしかに，すべて［のこと］において，しかし，とりわけ法において，衡平が顧慮さるべし。」

Placuit in omnibus rebus praecipuam esse justitiae aequitatisque quam stricti juris rationem. (C.3,1,8.)「あらゆる事件において厳格法

上の法理よりも正義及び衡平の法理が優越することは確定のことなり。」

(Bonae fidei) non congruit de apicibus juris disputare. (D.17,1,29,4. Ulpianus 7 disputationum)「法の極致を争うは（信義誠実に）かなわず。」

Multa jure civili contra rationem disputandi pro utilitate communi recpta esse, innumerabilibus exemplis probari potest. (D.9,2,51,2 Iulianus 86 digestorum)「市民法によって多数の事項が厳密なる理論に反して共同の利益のために採用されたことは無数の例をもってこれを証明するを得。」

XXXIX. Neque magnum damnum est, in mora modici temporis. (D.5,1,21. Ulpianus 70 ad edictum)「僅かなる時間の遅滞は大いなる損害にあらず。」

XL. In ambiguis rebus humaniorem sententiam sequi oportet. (D.34,5,10,1. Ulpianus 6 diputationum「曖昧なる事柄について，より人間の品位にかなう見解に従うを要す。」

Semper in dubiis benigniora praeferenda sunt. (D.50,17,56. Gaius 3 de legatis ad edictum urbicum)「疑しき場合にはつねにより寛大なことが優先さるべし。」

In re dubia benigniorem interpretationem sequi non minus iustius est quam tutius. (D.50,17,192,1. Marcellus 29 digestorum)「疑しき事柄において，より寛大な解釈に従うはより安全にして同じくより公正なり。」

XLI. Beneficio adfici hominem, interest hominis. (D.18,7,7. Papinian 10 quaest)「人［奴隷］に施されたる恩恵はその者の利益なり。」

XLII. Quod communiter omnibus prodest, hoc privatae utilitate praeferendum. (C.6,51,l,14.)「全員にとって共通に利益となるものは私的な有用性に優先すべし。」

Articulus III. Regulae generales ex jure civili petitae.　第３款　市民

法より求められる一般的なレグラエ

XLIII. Quod initio vitiosum est, non potest tractu temporis convalescere. (D.50,17,29. Paulus 8 ad Sabinum)「当初において瑕疵あるものは，時の経過によるも有効たりえず。」

XLIV. (Plerique) etiam ea quae recte constiterunt resolvi putant, cum in eum casum recciderunt a quo non potuissent consistere. (D.45,1,98pr. Marcellus 20 digestorum)「(多数者は) 適正に成立したるものも，存立不可能な状況に陥った時は解消されると考える。」

Attamen　しかしながら，

Non est novum, ut quae semel utiliter constituta sunt, durent, licet ille casus exstiterit, a quo initium capere non potuerunt. (D.50,17,85,1. Paulus 6 quaestionum)「一たび有効に成立したものが，たとえ，［もし当初に存在していたとすれば］それを発生させることができなかったようなあの原因が生じたとしても，なお存続するは新奇ならず。」

XLV. Cum principalis causa non consistit, ne ea quidem quae sequuntur locum habent. (D.50,17,129.1. Paulus 8 ad Sabinum)「主たる状況が存立せざるときには，附随するものも生ぜず。」

より正確に別法文において，

Cum principalis causa non consistat, plerumque ne ea quidem, quae sequuntur, locum habent. (D.50,17,178. Paulus 15 ad Plautium)「主たる状況が存立しないときには，通常は，附随するものも生ぜず。」

Corollarium　系

Quae accessionum locum obtinet extinguuntur, cum principales res peremptae fuerint. (D.33,8,2. Gaius 18 ad edictum provinciale)「主物が消滅した場合には，従物の位置を占めるものも消滅す。」

XLVI. Expressa nocent, non expressa non nocent. (D.50,17,195. Modestinus 7 differentiarum)「表明されたことは害するが，表明されなかったことは人を害せず。」

XLVII. Non solent quae abundant vitiare scripturas. (D.50,17,94.

Ulpianus 2 fideicommissorum)「過剰なことは文書を無効とせざるがつねなり。」

XLVIII. Ea, quae dari impossibilia sunt vel quae in rerum natura non sunt, pro non adiectis habentur. (D.50,17,135. Ulpianus 23 ad edictum)「与えられることが不可能なもの，あるいは，事物の性質上存在しないものは，付加されなかったものと扱われる。」

XLIX. Nec corrumpi aut mutari quod recte transactum est, superveniente delicto potest. (D.43,19.2. Paulus 66 ad edictum)「適正に締結された取引は，後発の不法行為により損なわれ改変されるを得ず。」

L. Ordo scripturae non impedit causam juris ac voluntatis. (D.31,77,12. Papinianus 8 responsorum)「書面の順番は法及び意思の原因を損なわず。」

Nec enim ordo scripturae spectatur, sed potius ex jure sumitur id quod agi videtur. (D.46,3,6 Paulus 4 ad Plautium)「書面の順番が考慮されるのではなく，むしろ行われると見られることが法から導出される。」

(Contra quandoque) Fortassis quis recte dixerit, ordinem scripturae sequendum. (D.40,5,24,17 Ulpianus 5 fideicommisorium)（反対に，いつにても，）「おそらくはある者は書面の順番に従うべしと適正に主張できよう。」

LI. In omnibus causis pro facto accipitur id, in quo per alium morae sit, quo minus fiat. (D.50,17,39. Pomponius 32 ad Sabinum)「あらゆる事案において，［あることが］生じないようにと他の［人］を通じて遅滞が生ずるように［された］場合には，そのことが［現実に］生じたものとうけとられる。」

LII. In re pari, potiorem causam esse prohibentis constat. (D.10,3,28. Papinianus 7 quaestionum)「持分の均しい物について，より有利な状況が禁止を申し立てる者の側にあることは明らかなり。」

LIII.Quod quis suo nomine exercere prohibetur, id nec per subjectam personam agere debet. (C.8,11,6.)「ある者が自らの名で行使するを禁じられるものは，従属者を通じても行うべからず。」

Contra: Saepe quod quis ex sua persona non habet, hoc per extraneum petere potest. (D.20,3,3. Paulus 3 quaestionum)「反対：しばしばある者が自らの人格に基づいて有し得ぬものを他人を通じて請求するを得。」

LIV. Jus civile vigilantibus scriptum est. (D.42,8,24.Scaevola singulari quaestionum publice tractarum)「市民法は覚醒者のために書かれたり。」

LV. Ea, quae raro accidunt, non temere in agendis negotiis computantur. (D.50,17,64. Iulianus 29 digestorum)「まれにしか生じないことは，事務執行のさい安易には考慮されない。」

LVI. Plus valet quod in veritate est, quam quod in opinione. (Inst.2, 11)「真実中にあるものは寧ろ観念中にあるものより一層有効なり。」

LVII. Plus enim in re est quam in existimatione. (D.40,2,4 Iulianus 4 disputationum)「評価におけるよりも実体における方がより有力なり。」

SECTIO II. Regulae circa leges ipsas, earum vim et interpretationem: ubi de consuetudine et rescriptis.　第２節　法律自体，その意味及び解釈に関するレグラエ

Articulus I. De legibus proprie dictis.　第１款　本来的にいわゆる法律について

§1. De legibus constituendis.　第１項　法律を制定することについて

LVIII. Jura constitui oportet in his quae ut plurimum accidunt, non quae ex inopinato. (D.1,3,3 Pomponius 25 ad Sabinum).「法は通常発生すべき事件について規定すべきものにして予想以外に発生すべき事件について規定することを要せず。」

LIX. Leges et constitutiones futuris certum est dare formam negotiis, non ad facta praeterita revocari; nisi nominatim et de praeterito

tempore et ad huc pendentibus negotiis cautum sit. (C.1,14,7)「法律及び勅法は将来に於いて発生すべき事件に適用あるものとし，事前の事件に適用なきものとす。但し特別なる規定を以てこれを過去の事件に遡及せしめ若しくは現に繫属中の事件に適用せしむる場合はこの限りに非ず。」

LX. In rebus novis constitutendis evidens esse debet utilitas ut recedatur ab eo jure quod diu aequum visum est. (D.1,4,2 Ulpian 4 de fiducia)「およそ新規定を設けるにあたり従来久しく衡平と認められた法と相容れざる規定を設けるに足りる顕著な利益の存することを要す。」

LXI. Jura non in singulas personas, sed generaliter constitutuntur. (D.1,3,8. Ulpian 3 ad Sabinum)「法は各個人のために非ず一般のために制定するものなり。」

§2. De virtute legis.　第2項　法律の効力について

LXII-1. Legis virtus haec est, imperare, vetare, permitter, punire. (D.1,3,7 Modest. 1 reg.)「法律の効用は命令し禁止し許可し又は処罰することである。」

2. Non dubium est in legem committere, eum qui verba legis amplexus contra legis nititur voluntatem. C.1,14,5.「法律の文言を厳守してその精神を失わしめと企てる者は法律に違反するものたること疑いなきところなり。」

LXIII. Praescriptio temporis, juri publico non debet obsistere, sed nec rescripta quidem. (C.8,11,6.)「時効は公けの法に反すべからざれども，皇帝指令もまたこれを害せず。」

LXIV. Privatorum conventio iuri publico non derogat. (D.50,17,45,1. Ulpianus 30 ad edictum)「私人間の合意は公けの法を廃さず。」

(Constat) Privatorum cautionem, legum auctoritate non censeri. (D.38,16,16 Papinianus 12 responsorum.)「私人間の合意が法律の権威に

よって認められぬことは明らかなり。」

(Et) Nemo jus publicum remittere potest cautionibus, nec mutare formam antiquitus constitutam. (D.26,7,5,7 Ulpian 35 ad edictum).「(而して) 何人たりとも公けの法をかかる方法により回避することも古くから決められた形式を変更もすべからず。」

LXV. (Est) regula juris antiqui; omnes licentiam habere his quae pro se introducta sunt renunciare. (C.2,3,29.)「およそ人は誰も自身のために設けられたるものを拒絶し得ることは，古法のレグラ（なり)。」

(Unicuique licet) sui iuris persecutionem aut spem futurae perceptionis deteriorem facere. (D.2,14,46 Tulliph. 2 quaest.)「およそ人は自己の権利実行の方法又は将来利益を取得すべきの希望を不良の状態に変更することができる。」

§3. Regulae ad perspiciendum legis sensum.　第3項　法律の意味を認識するためのレグラエ

LXVI. Incivile est nisi tota lege perspecta, una aliqua particula eius proposita, judicare vel respondere. (D.1,3,24. Celsus 9 digestorum)「一法律の全部を達観せずその一部のみに依拠して判決し又は解答することは法律家たる者のなすべきことではない。」

LXVII. Optima est legum interpres, consuetudo. (D.1,3,37 Paulus 1 quaest.)「慣習は，最善の法律解釈者なり。」

LXVIII. Minime sunt mutanda, quae interpretationem certam semper habuerunt. D.1,3,23 Paulus 4 ad Plaut.「従来常に一定の解釈を施して来たときは決して変更してはならない。」

LXIX. In re dubia melius est verbis edicti servire. (D.14,1,20 Ulpianus 28 ad edictum)「疑わしいき事項について告示文言に従うはよりよきことなり。」

In ambigua voce legis, ea potius accipienda est signifcatio quae vitio caret; praesertium cum etiam voluntas legis ex hoc casu colligi possit.

(D.1,3,19 Celsus 33 digestorum)「法律の用語が曖昧なるときは不条理に陥らない意義を採用すべきである。このように法律の真意に至り得る場合には当然のことである。」

LXX. (Paulus respondit:) non oportere jus civile calumniari, neque verba captari; sed qua mente quid dicitur, animadvertere convenire. (D.9,4,19 Paulus 5 Alf.)「市民法は濫訴の為めに用いられてはならず，言葉は理屈っぽく解されてはならぬ。しかし如何なる意図により何が主張されるか吟味することはふさわしい（とパウルスは言う）。」

LXXI. Cum lex in praeteritum quid indulget in futurum vetat. (D.1,3,22 Ulpian 35 ad ed.)「法律が過去のあることを不問に附するもなお，将来においてはこれを禁止する。」

§4. Regulae circa investigationem mentis legis.　第4項　法律意思の探求に関するレグラエ

Primum theorema. — 第1目

LXXII. Scire leges non hoc est, verba earum tenere, sed vim et potestatem. (D.1,3,17. Celsus 26 digestorum)「法律の知暁とは，その用語を捕捉することではなくその意義及び適用を了解することである。」

Regulae practicae.　実践的なレグラエ

LXXIII. Semper quasi hoc legibus inesse credi oportet, ut ad eas quoque personas et ad ear res pertinerent quae qundoque similes erunt. (D.1,3,27. Terutulian 1 quaest.)「法律がその規定するところに類似した人事及び法律関係の発生するたびにこれをも律することは法律の本質ともいうべきものであるとの趣意をつねに了解すべきである。」

LXXIV. Quod contra rationem iuris receptum est, non est producendum ad consequentiam. (D.50,17,141pr. Paulus 54 ad edictum)「法の理に反して許されたるものは結論へと導かれるべからず。」

Quae propter necessitatem recepta sunt, non debent in argumentum trahi.（D.50,17,162. Paulus 70 ad edictum）「緊急のゆえに許されたることは論拠として引かるべからず。」

Quod non ratione introductum, sed errore primum, deinde consuetudine obtentum est; in aliis similibus non obtinet.（D.1,3,39. Celsus 23 digestorum）「ある規則が合理的であるが故に採用されたのはではなく，当初は錯誤に基づき後に慣習によろ確定されたものであるときは，その規則は類似の他の場合に効力を有さない。」.

LXXV. Nulla juris ratio aut aequitatis benignitas patitur, ut quae salubriter pro utilitate hominum introducuntur, ea nos duriore inteptretatione contra ipsorum commodum producamus ad severitatem.（D.1,3,25. Modest. 8 responsa）「法理も恩恵を主眼とする衡平も認容しないことがあり，幸いにも人類の福利のために採用した規則もむしろ厳格な解釈により人類の利益に反して峻厳なる結果を生むことがある。」

Secundum theorema. — 第 2 目

LXXVI. Non omnium quae a majoribus instituta sunt, ratio reddi potest.（D,1,3,20 Iulianus 55 digestorum）「父祖たちの制定した規定は必ずしも皆其の理由を説示できるわけではない。」

Et ideo rationes eorum quae constituuntur, inquiri non oportet. Alioquin multa ex his quae certa sunt, subvertuntur.（D.1,3,21. Neratius 6 varia）「故に一旦制定せられた法の理由はこれを討究すべきではない。そうでなければすでにに確立した多数の規則は失効すことになる。」

§5. De officio jurisconsulti circa species de quibus diversae leges sunt, aut de quibus nulla lex scripta est.　第 5 項　当該事項について複数の異なった法律が存在する場合或いは何ら書かれたる法律の存在せざる

場合の法学者の職務について

LXVII. In his quae contra rationem juris constituta sunt, non possumus sequi regulam juris. (D.1,3,15.Iulianus 27 digestorum)「法の原理に違反する規則の制定ありたるときは之を普通の規則として遵奉することを得ず。」

LXVIII. 1. Constitutiones tempore posteriores, potiores sunt his quae ipsas praecesserut. (D.1,4,4 Modestinus 2 excusationum)「新法はその効力において旧法に優る。」

2. Non est novum ut priores leges ad posteriores trahantur. (D.1,3,26. Paulus 4 quaestionum)「旧法がを牽連せしむる援用にして新法律を解釈するは新事実ではない。」

3. Sed et posteriores leges ad priores pertinet, nisi contrariae sint. (D.1,3,28. Paulus 5 ad leg. Iul. et Pap.)「しかし又新旧法律に矛盾がなければ新法律は旧法律の解釈に資する。」

Articulus II. De consuetudine seu jure non scripto.　第2款　慣習もしくは不文法について

LXXX. Inveterata consuetudo pro lege non immerito custoditur. Et hoc est jus quod dicitur moribus constitutum. (D.1,3,32,1. Iulianus 84 digestorum)「はるか古来よりの慣習はこれを法律と看做して遵守することは不当なことではない。このような法はいわゆる慣習により確定された法である。」

Mos namque retinendus est fidelissimae vetustatis. (C. 6,28,18)「何となれば古人たち以来の慣行は忠実至極に遵守さるべきものなればなり。」

LXXXI. Rectissime etiam illud receptum est; ut leges non solo suffragio legislatoris, sed etiam tacito consesu omnium per desuetudinem abrogentur. (D.1,3,32,1 Iulianus 83 digetorum)「法律はたんに立法者の表決によってのみならず万民の黙契により不使用を通じて廃止され

ることも学説のひとしく承認することは至極正当なことである。」

Scholium　敷衍

Consuetudinis ususque longaevi non vilis auctoritas est; verum non usque adeo sui valitura momento, ut aut rationem vincat, aut legem. (C.8,52,2)「長期の慣習法及び慣行の権威は軽からずと雖も，道理や法律に優るほどの効力には及ぶものに非ず。」

LXXXII. Cum de consutudine civitatis vel provinciae confidere quis videtur; primum illud explorandum arbiror, an etiam contradicto aliquando judicio, consuetudo firmata sit. (D.1,3,34 Ulpian 1 de off. proconsul.)「人ありて某市又は某県の慣習を援用するときは予の見解にては此の如き慣習は嘗て一たび某訴訟事件に於いて争われたる後確認せられたるものなりや否やを須く先ず討究することを要す。」

Articulus III. De privilegiis et rescriptis.　第3款　特権及び詔勅について

§1. Regula communis omnibus beneficiis; sive certae personae, sive certa personarum generi concessa sint.　第1項　特定の人若しくは特定の人の類に認められたるすべての恩恵に共通なるレグラ

LXXXIII. Privilegium ad alienam injuriam porrigi non oportet. (D.26,7,40 Papinianus 6 responsorum)「特権は他人の侵害に及ぶべからず。」

§2. Regulae circa beneficia personalia.　第2項　個人的恩恵に関するレグラ

LXXXIV. Rescripta contra jus elicita, ab omnibus judicibus refutari praecipimus; nisi forte sit aliquid quod non laedat alium, (C.1,19,7)「法律に違犯して皇帝の詔勅を得たるものあるときは裁判官は之を否認することを得るものとす。但し皇帝の詔勅が他人に何らの害悪を与えざるときはこの限りに非ず。」

LXXXV. Mendax precator careat penitus impetratis; et si nimia

mentientis inveniatur improbitas, etiam severitati subjaceat judicantis. l.5.cod. si contra jus etc. (C.1,22,5)「虚偽の請願者は決して利益を得せしむことなかるべし。若しその虚偽者の不正が著しきこと明らかなれば，裁判官の厳重なる処分にも附すべきものとす。」

LXXXVI. Si qua beneficia personalia sine die et consule fuerint deprehensa, auctoritate careant. l.4. cod. de divers. rescript. (C.1,23,4)「特定人に賦与されたる恩恵にして日付及び執政官の名称なくば，その効力なし。」

XXXVII. Beneficium imperatoris, quod a divina scilicet ejus indulgentia proficiscitur, quam plenissime interpretari debemus. (D.1.4.3. Ulpianus fideicommisorum libro 4)「皇帝の恩恵は実に神の如き其の慈恵心の発露なるが故にきわめて広汎にこれを解釈することを要する。」

LXXXVIII. Rescripta quibus usi non fuerint qui in fata concesserunt, heredes possunt allegare. (CTh.1,2,2)「既に死亡したる者にして生前用いざりし詔勅を相続人は援用するを得。」

LXXXIX. Neratius consultus, an quod beneficium dare se quasi viventi caesar rescripserat, iam defuncto dedisse existimaretur, respondit non videri sibi principem, quod ei, quem vivere existimabat, concessisset, defuncto concessisse: quem tamen modum esse beneficii sui vellet, ipsius aestimationem esse. D.50,17,191. Celsus 33 digestorum:「皇帝がいわば生存中の人に対するようにある人に自身が与えるように指令していたその特典を，すでに死亡してしまっているときにも，その人に，彼［皇帝］が与えたものと考えられるかどうかを諮問されたとき，ネラティウスは，自身には，彼［皇帝］が，生きているものと考えていたその人に授与していたものを死亡してしまった人に授与したものとは考えられない，しかし，それでもやはり，彼［皇帝］自身の与える特典をどのような態様のものにしたいのかは，彼自身の判断に属する事柄である，と解答した。」

＊本稿は，2013 年度～ 2016 年度科学研究費基盤研究（C）「ローマ法におけるレグラエの研究」研究課題番号 25380013 の研究成果の一部である。この場を借りて御礼申し上げます。